

小学生が支援する高齢者向けパソコン入門講座開催の試み

3Y-02

根本秀政 大熊雅士 神野紀子¹ 猪俣知恵子[#] 小島之範[#] 小川順弘[#] 鈴木清隆[#] 平山満義^{*} 中川正樹^{*}
小金井市教育委員会 小金井市福祉公社¹ 小金井市立小金井第一小学校[#] 東京農工大学^{*}

1 はじめに

開かれた学校づくりを求められる今日、学校当局にとって地域社会との交流はとりわけ重要な課題になっていて、伝統工芸・技能等の技を持つ方々や人生の達人を招いて、「ようこそ先輩」といったスタイルのふれあいの場が広がりを見せている。しかしながらこれらの試みは、いずれの場合も児童生徒の参加が受身の存在になることが多く、主体的立場になることは少ない。

小金井市福祉公社ではかねて高齢者向けパソコン入門講座開催を企画検討してきたが、この度、同市立小金井第一小学校（以下 小金井一小）の協力を得て、同校パソコンルームを借りて初心者向け講座開催を実現させるに至った。

日頃、交流教育を推進し、相互に理解を深めようとする態度や奉仕的態度を育てることを教育目標達成の基本方針に掲げている小金井一小では、この企画の相談を受けて同校パソコンクラブの児童による学習支援を申し出るところとなった。

本稿では、小学生児童と高齢者との出会いが実践的福祉活動の側面を持つ一方で、教えることを通じて自らが学ぶ総合的な学習の試みとなった事例について考察する。

2 課題選び

2.1 要求分析（背景の把握）

福祉公社の当初企画では、とりあえずコンピュータに触れる機会を提供することに主眼が置かれていた。しかしながら高齢者に限らず初心者にとって、具体的な課題を用意した方が触ることだけの学習を

呼びかけるよりも焦点がボケずに楽しさの実感に期待を持たせられる。

また、学習支援をする小学生児童たちの最も得意な領域には「お絵描き」がある。お絵描きはマウス操作に馴染むための格好の練習になるし、特殊なソフトに頼らずに windows95/98, 2000 に添付されている Paintbrush を用いれば、学校だけでなく何処でも活用することが可能になる。

反面、小学生児童は文字入力を必ずしも得意としていないし、高齢者にとってもキーボード操作には気後れが働いている。コンピュータ利用の楽しさを体験するところに講座開催の所期の目的があるならば、多くを詰め込むよりは短めの文章入力に留める方が無難と考えられる。

2.2 身近な日常生活との関連付け

これまでにコンピュータユーザーと目されてこなかった高齢者たちは、IT 革命なることばの氾濫する中で、世の中から置き去りにされている感を強く抱いている。孫との間で電子メールを交歓したり、ワープロで自分史編纂に取り組んでいる高齢者の存在を耳にすることはあっても、まだまだ少数派でしかないのが現実である。

したがって、講座開催に際してコンピュータを難しいもの、あるいは特殊な存在との先入観を払拭させるには、高齢者の日常生活に身近な存在と結びつけることが親しみを与える重要な要素になると考えて、絵手紙づくりを課題に選ぶに至った。

3 「絵手紙」づくり

3.1 第1週（お絵描きに挑戦）

大学生2人の支援を受けながらマウス操作のスタートを切ることになった高齢者たちは、始めのうこそ表情に硬さが見られたものの、20人のパソコンクラブ児童の登場によって一組ずつのペアリングが決まるや、一気にカラフルな画面描画が始まった。

An attempt to support an introductory course on PC for aged people by primary school children.
H. Nemoto, M. ōkuma, N. Jinno, C. Inomata, N. Kojima, Y. Ogawa, K. Suzuki, M. Hirayama and M. Nakagawa
Koganei City Board of Education
3-41-15 Maehara-cho, Koganei, Tokyo, 184-8504, Japan

大人が指導する場合には一つ一つのツールの役割とか使い方の概念から入りがちであるが、児童たちの支援振りをもっと直接的で、まず、自分が何かの絵を描いてみせた後、同じ作業の模倣を求めることから始まる。ツールの役割などの説明は一切しない。質問されてはじめて答える程度であった。

前もって児童たちと約束をしておいた事柄は、

- ・あまり上手な絵を描いて見せないことが親切
- ・できるだけ参加者に操作時間を多く与える

の2点だけである。

3.2 第2週（文字入力に挑戦）

絵手紙をはがきに印刷をして、アドレスを書けば親しい人に発信が可能になることを想定して、混乱を避けるためにはがきサイズに書式設定した画面を事前準備して置いたが、いざ文章入力の段になると半数以上の参加者がローマ字入力を選んでいては意外な発見であった。

また、あらかじめ手紙文を考えてあったと見えて文字キーを探す手間はかかっても、文章を考えるための躊躇いはほとんど見受けられなかった。

3.3 第3週（手作り絵手紙）

児童による支援ぶりが効果的であったのか、あるいは、絵心のある方たちが揃っていたからなのかはともかくとして、誰一人出来合いのイラストに頼ろうとする様子を見せずに、全員が自前の絵を立派に描画してオリジナルな絵手紙を完成させる成果を得た。



図1 ある参加者の作品

4 高齢者と小学生児童との出会い

4.1 小学生から見た高齢者

核家族化が進んでいて、ほとんどの児童が高齢者と身近に接する機会を持っていない。近所に居住の高齢者があっても、挨拶を交わす程度の希薄な関係に過ぎないが、今回の試みでは、児童が高齢者を支援する立場に置かれたこともあって、積極的に働きかける機会づくりにつながったといえる。

結果として培われた児童の高齢者観は、

- ・みんな元気がある
- ・若い
- ・いつもニコニコしている
- ・仲良しになれた

等に代表された。

なお、教える側に廻った感想は、

- ・疲れる
- ・責任を感じる
- ・楽しい
- ・覚えてくれたかどうか不安

等に集中しており、強い自覚と責任感が窺われた。

4.2 教師からの児童観察

小学生ながらに教える立場を自覚してくれ、大人に対する言葉遣いや態度にも平素とは見違える様子が現れていた。

子どもにとって教えるということは、他者理解・尊重が重要であることを身を持って体験でき、人間尊重教育の糧となった。子どもたちが地域に愛着を抱くという意味においても、地域の高齢者と知り合いになれたことは意義深い。

4.3 高齢者（講習会参加者）の感想

最終日に、一人一人の作品をスクリーンに映し出して作者コメントを求めたところ、はにかみながらも全員が満足の様子であった。

- ・子どもに教わる抵抗感はまったくなかった
- ・みな真剣で、上手に教えてくれた
- ・自信はないが楽しく学習できた

5 おわりに

初めはどうなることかとやや不安と緊張の様子も見られた高齢者であったが、孫の世代にあたる子どもたちとの協同作業は自然に活気を育み、若やいに見える毎日であった。

教師の観察にもあったように、教える側と教わる側とがそれぞれに自己顕示を捨てて他者を理解し尊重することこそが、人と接する際の原点であることをあらためて確認させられた。また、子どもたちにとって、教える立場を経験したことが自己の学習にプラスになったことも意義深い検証になった。

最後に、アシスタントを務めてくれた東京農工大学学生（田村和彦 M1, 西原紫乃 B4 両君）ならびに 20 人の小金井一小パソコンクラブ児童に感謝を申し上げて結びとしたい。